

## 6月20日のウクライナ情報

安齋育郎

### ●EU の弾丸製造拡大法案に加盟国大半が反対 ウクライナ向け弾丸の自前製造拒否 (2023年6月18日)

EU の 21 カ国が弾丸の製造拡大法案(ASAP)に記された数項目を国益に反するとして、その削除に支持を示している。EU 政策に特化したブリュッセルの独立系メディア「ユーラクティブ」が外交筋からの情報として報じた。

法案に異議を唱える数か国は、欧州委員会が現在の非常事態を各国の統治権を廃止するために悪用していると利用して非難している。法案を批判する諸国は自国の経済に損失になるとして、軍事の優先的発注の割り当てを決める権利を欧州委員会や少数の加盟国によるグループに渡すことを嫌がっている。さらに、ユーラクティブは、これらの諸国は製造に関する機密情報の欧州委員会との共有義務から自国企業を解放したいと考えていると指摘している。

弾丸の製造拡大法案は、もともと欧州の産業を 2024 年の段階で弾丸 100 万発の生産が可能なレベルまで拡大するために欧州委員会が提案した。製造された弾丸はその圧倒的大半が弾丸を緊急に必要とするウクライナに供給することを見込んでいる。

ユーラクティブが振り返るように、弾薬生産増強に関する法律案は当初、欧州委員会が欧州の産業能力を 2024 年に 100 万個の砲弾を生産できる水準に引き上げることを提案し、その圧倒的多数はウクライナの緊急弾薬需要に充当されるとした。

米国はこれより前、ウクライナに対し、防空システム、対戦車兵器、装甲車、砲身砲用弾薬、自走多連装ロケット砲ハイマースなど、総額 3 億 2500 万ドル(455 億 6300 万円)相当の新たな軍事支援パッケージを提供すると発表した。



### ●鹵獲された戦車「レオパルト 2」 ロシアにどのように調べられるのか(2023年6月17日)

ドイツの戦車「レオパルト」と米国の歩兵戦闘車「ブラッドレー」は近く、ロシアの軍産複合体の専門家によって詳しい調査がなされる。「レオパルト」と「ブラッドレー」は、ロシアの軍産複合体が注目する特徴を数多く備えている。

#### 鹵獲に成功した車両の数

ザポロジェ戦線における攻勢の最初の数日間、ウクライナ軍は「A6」改良型を含む少なくとも 8

台の「レオパルト 2」戦車を損失した。このうちの少なくとも 2 台が、無限軌道(いわゆるカタピラ)や戦闘室の損傷など状態の差はあれども鹵獲された可能性がある。「ブラッドレー」の鹵獲数は 2~5 台とされている。

ブラッドレー歩兵戦闘車のどんな要素が注目されているのか？

ウクライナには、「M2A2 ODS(砂漠の嵐作戦)」規格に改良された「ブラッドレー」が供与された。これは、1991 年のイラク戦争で得た経験に基づいた改良を施したものである。

ロシア軍産複合体が特に注目しているのは、ブラッドレーに搭載されている 25 ミリ機関砲「M242 ブッシュマスター」だといえるだろう。この機関砲は多くの国で標準装備となっており、他のシリーズと部品や技術的ソリューションを共有する。ブッシュマスター用の 25 ミリ徹甲弾も同様に関心を集めている。

演習場でロシアの武器に向けて試射すれば、「ブッシュマスター」がロシア製装備に対しどの程度有効であるかが明らかになるだろう。その後、ロシア製の装甲を改善する必要性について結論を出すことができる。

開閉式スロープ(車両後部の乗降用扉)を備えた油圧システムも同様に注目される。現時点でこのような積み下ろしシステムを備えたロシアの車両は、歩兵戦闘車「マヌル」「クルガネツ」、装甲兵員輸送車「ブーメランク」、戦車「アルマータ」をベースにした重歩兵戦闘車の 3 種のみである。

装甲用合金や照準装置、ベトロニクスなどその他の要素も調査の対象となる可能性がある。ただし、これは供与時にどの部品が取り外されたかによる。

米国の「ブラッドレーM2A2 ODS」には、戦術航法装置や戦闘指揮システム「FBCB2」などの装備が搭載されていた。

戦車「レオパルト」の注目点は？

ウクライナ軍がオレホフ方面で失った戦車「レオパルト 2A6」は、ウクライナに供与されたなかで最新の改良型だ。

このバージョンの「レオパルト 2」には、独ラインメタル製の 120 ミリ戦車砲「L/55」が装備されている。演習場での「T-72B3」「T-80BVM」「T-90M」「T-14 アルマータ」などのロシアの主力戦車を対象とした試射で、この兵器の性能を研究することは特に興味深い。

また、新たな戦車情報制御システムや火砲制御システムといった、新型の主砲や弾薬向けにつくられた各種設備が注目されている。また、主砲安定化システムや新型の赤外線造影装置「サファイア 3」も関心を集めている。

また、戦車の装甲もロシアの軍産複合体にとっての大きな関心の一つだ。装甲の設計やタイプ、鋼鉄の厚さや品質、充填材やその配置設計は、「レオパルト」の防御面での特性を把握するのに役立ち、確実に破壊する方法を見つける一助になる。また、「レオパルト 2A6」には第 3 世代の複合装甲が搭載されていることも指摘しておきたい。

「アルマータ」のように、パワーパックの原理に基づいて組み立てられたエンジンや変速機なども、調査の対象になるとみられる。「レオパルト」にはセミオートマチックトランスミッション「レンク HSWL 354」と総排気量 1500 リットルのディーゼルエンジン「MTU」が備え付けられている。

結論は？

失敗に終わったウクライナの攻勢の過程で鹵獲された西側の兵器は、少なくとも 2030 年まで北大西洋条約機構(NATO)諸国の軍で第一線として活躍することになる。装甲やその他の特性、部品などを研究することは、NATO の兵器とどのように戦い、どういった軍備が必要になるかを理解する

参考になる。



### ●ローマで行われた反政府デモ(2023年6月18日)

参加者は、ウクライナ紛争が NATO の拡張によって引き起こされたことを指摘し、欧米の対ロシア政策を批判した。

<https://twitter.com/i/status/1670236884235341824>



### ●トランプ大統領候補へのゼレンスキーの疑問(2023年6月18日)

投稿者コメント:ロシア・ウクライナ紛争を 24 時間で終わらせるというトランプの主張にゼレンスキー疑問「なぜ彼はもっと早くそうしなかったんだ?彼はここで戦争が起きている時に大統領だったんだ」

なるほど、ゼレンスキーは戦争が 2014 年から始まった事を認めてるんだね!





## ●ロシア軍が 24 時間以内にキエフの意思決定センターと司令塔を空爆(2023 年 6 月 18 日)

ロシア国防省によると、ウクライナでは、この 24 時間で約 700 人の兵士と Mi-24 ヘリコプターがロシア軍によって一掃された。また、高精度の攻撃で意思決定センターと司令部を平定した。複数の無人機、HIMARS、ハリケーン・ロケットが迎撃された。

ロシア軍は、キエフ軍の意思決定センターの 1 つに対して高精度の長距離空爆を実施したと、ロシア国防省は 6 月 17 日の日報で報告した。”標的は命中した ”と付け加えている。

過去 24 時間、ウクライナはドネツク南、ザポロジエ、ドネツク軸で反撃を続けている。

### 人的被害

戦闘中、ロシア軍はドネツク軸での 340 人を含む約 705 人のウクライナ兵を無力化した。

さらに、キエフ軍はクピャンスク軸で 40 人以上、ザポロジエ軸で 235 人以上の兵士を失い、そのうち 30 人はドネツク人民共和国(DPR)のヴレメフカ峡谷地域にいた。最後に、クラスニー・リマン軸で最大 50 人、ケルソン軸で最大 40 人が排除された。

ロシア軍はまた、2 つの破壊工作・偵察グループを撃破した。

ドネツク人民共和国(DPR)では、指揮・観測所が爆撃された。

### 兵器の破壊

この地域では、ロシア空軍は Mi-24 ヘリコプターも撃墜した。

対空防衛隊は、HIMARS と Ouragan ロケット弾 6 発とドローン 16 機を迎撃した。

行動不能になった大砲の中には、D-30 榴弾砲 5 門、D-20 が 2 門、Gvozdika 自走砲 4 門、Guiatsint-B があった。

また、戦車 6 台、P-18 レーダー 2 台、アメリカ製の M777 砲システムもある。

ドネツク人民共和国では、地対空ミサイルシステム「S-300」の目標探知・誘導レーダーも破壊された。

24 時間で、ロシアの攻撃は、103 の地域で、97 の砲兵隊基地と、軍人と装備を標的とした。



## ●スコット・リッター:ウクライナの反撃は守備の壁にぶつかる(2023年6月10日)

ここ数日の間に、ウクライナは最も訓練され、最も装備の整った 2 つの機械化旅団を、前線のザポロジエ地区で固まったロシアの守備隊に対する攻撃作戦に投入した。

この 2 個旅団はこの任務のために厳選されたもので、西側の最新戦車と歩兵戦闘車を装備し、西

側から供給された大砲で支援し、NATO が提供した情報と NATO の作戦計画によって形成された NATO 固有の戦術を使用していた。つまり、この 2 つの旅団は、NATO のトップレベルの能力であり、ロシアを破壊するために進行中の戦争におけるウクライナと西側諸国の結びつきの典型であった。

しかし、失敗した。

破壊された米国製 M-2 ブラッドレー歩兵戦闘車やドイツ製レオパルド 2A6 戦車がウクライナの草原に放置され燃えている映像を世界が目にするにつれ、ロシアの戦略的敗北という大きな計画の無駄に関する厳しい事実が身に染みてくる。

しかし、現実には、ウクライナは、ロシアの防御を突破してクリミアとロシアを結ぶ陸橋を断ち切るという目標を達成することはできなかったのだ。これは、ウクライナの西側支援者が、ウクライナ人を集団自殺に追い込み、ロシア側にも同様の犠牲者を出すという絵空事のような考えを広めたものである。

西側諸国は、ロシアがこのような犠牲者によって士気を失い、ウクライナと西側同盟国の双方が受け入れられる条件で、交渉による紛争終結を受け入れることを望んでいた。

しかし、これまでのところ、ウクライナと欧米の同盟国は失敗している。

この失敗の原因は、2 つの点にある。第一に、ウクライナと NATO の同盟国がロシア軍、特にザポロジエ地方に展開する部隊の戦闘能力を低く評価していたこと、第二に、ロシアの防衛を突破する任務を与えられたウクライナ軍に提供された NATO の訓練と装備に非現実的な期待をかけていたことである。

ウクライナとその NATO パートナーが反攻の焦点として選んだ地域は、第 58 複合武器軍に属する第 42 ガード運動化ライフル師団によって保持されていた。米国や NATO と密接な関係にある米国のシンクタンク「戦争研究所」は、第 42 ガード機動銃師団の部隊について、“動員された新兵やボランティアが主体であるため、訓練や規律の悪さに問題があると考えられる ”と主張している。

さらに、2022 年の特別軍事作戦の初期段階において、配下の連隊のうち少なくとも 1 連隊(第 70 機動小銃連隊)の成績が悪かったと非難しているのである。

したがって、NATO とウクライナの軍事計画者は、ロシア軍の指揮統制の弱さと士気の低さを強調する情報評価を用いて、過去の実績の低さと組み合わせると、第 42 ガード機動小銃師団が配備するザポロジエ・セクターのロシア軍の防御は NATO 式の攻撃の重さで崩壊すると考え、ウクライナ軍がロシアの防御に深く入り込むことを可能にしたと信じるのが妥当である。

ザポロジエでの戦闘はまだ終わっていないが、戦場での最初の結果は、ウクライナと NATO パートナーの予想に反して、第 42 ガードライフル師団の兵士がプロフェッショナルな方法で任務を遂行し、ウクライナ軍の攻撃部隊を決定的に撃破したことを示している。第 70 普通科ライフル連隊は、困難な状況下で非常に良い成績を収めたと評価されている。第 291 連隊、第 71 連隊、第 22 スパツナズ旅団の特殊部隊の兵士も同様だ。ISW のアナリストは、ロシア防衛軍の最初の成功を評価し、“ロシア軍は、ウクライナの攻撃に対応して、正式な戦術的防衛ドクトリンを実行したようだ ”と指摘した。

なぜなら、ザポロジエ地区でロシア軍を指揮しているのは、現代ロシアの防衛ドクトリンを考案したアレクサンドル・ロマンチュク大佐だからである。2023 年 4 月、当時ロシア連邦軍統合兵器アカデミー(フォート・レブンワースの米陸軍指揮参謀大学に相当)の学長を務めていたロマンチュクは、“Prospects for Improving the Efficiency of Army Defensive Operations ”という論文を共著で執筆している。

その中でロマンチュクは、防衛軍の主な任務として「前進する敵のイニシアチブを無力化すること、すなわち、展開した戦力で前進を続けることが不可能な状態に持っていくこと」と指摘した。最終的に

は、敵の活動を低下させ、ショックグループによる敵を倒す決定的な反攻に転じることで、主導権を握ることができる。”

これは、ソ連時代のドクトリンを再掲したものである。実際、ロマンチュクは、1945年3月のバルトン湖周辺でのドイツ軍の攻撃作戦の撃退を、このドクトリンの理想的な実施例として引き合いに出し、ロシア軍がドイツ軍の攻撃を撃退した理由として、「予備兵(特に大砲)の大胆な作戦、対戦車予備兵の巧みな使用、警戒すべき障害物の切り離し、待ち伏せ火の配置」などを強調している。

しかし、ロマンチュクは、この論文で単に古いドクトリンを繰り返したわけではありません。その代わりに、現代の戦場で勝ち残ることができる防御方式を構築する上で、「分散型部隊」の概念を強調している。「分散型の防御作戦は、優勢な敵に対する論理的な反応となるべきである」とロマンチュクは書いている。

このような作戦は、「重要な地域、物、交通の要衝を最も重要な方向に分けて保持することに基づいており」、「地域に戦力と資源を均等に配分し、軍隊と特殊部隊の編隊と軍事ユニットを分散して使用することを特徴としている」という。

さらにロマンチュクは、この「分散した部隊」の理想的な展開方式について、8~12kmの距離を隔てた3つの別々の「防衛責任区域」に焦点を当てたものであることを説明した。これらの隙間は、ロシアの砲兵によってカバーされる。最初の「ゾーン」は「カバー」ゾーンで、その任務は敵の前進の主要な軸を定めることである。次の「ゾーン」は「メインライン・オブ・ディフェンス」で、障害物ベルトと火力(砲撃と空爆)を使って敵の攻撃を阻止するように設計されています。最後の「ゾーン」は「予備軍」で、攻撃軍を元の位置に押し戻すための反撃に責任を持つ。

ロマンチュクのドクトリンは、ザポロジエで採用されたロシアの防御方式の青写真であった。実際、ロマンチュクは連合軍アカデミーの教授職から引き抜かれ、ザポロジエ方面の指揮を執ることになった。つまり、NATOとウクライナ情報機関がロシアの防衛計画の「弱点」として選んだ場所は、ロシアの防衛戦闘のトップスペシャリストが設計し、彼の直接指揮下に置かれたのである。

NATOとウクライナは、ロシアには自国の軍事ドクトリンを成功裏に実行する軍事力がないと考え、ロシアの司令部にはこのドクトリンを実行するのに必要な複雑な作戦を調整するのに必要なコミュニケーションがなく、ロシア軍、特に最近動員された兵士には、ストレスの多い戦闘状況下でうまく機能するのに必要な訓練と士気の両方が欠けていると考えて賭けた。

**この2つの点で、彼らは間違っていたのだ。**

NATOとウクライナのロシア軍の能力に対する低い評価は、ザポロジエのロシア軍防衛を攻撃する任務を負ったウクライナの部隊、すなわち第33機械化旅団と第47機械化旅団に対する彼ら自身の誇張した評価を反映している。両部隊は、レオパルド戦車(第33部隊)やブラッドレー歩兵戦闘車(第47部隊)など、NATOの近代的な装備の供与を受けていた。両部隊の将兵は、ドイツで数週間の専門訓練を受け、小隊、中隊、大隊の戦術と攻撃作戦中の火力と機動力を統合した作戦に焦点を当てるなど、現代の複合武器作戦に関してNATOが提供できる最高の訓練を受けていた。

ウクライナ軍は、NATOの教官と一緒にあって、まずコンピューターシミュレーションで現代の戦場の複雑さを学び、その後、NATOが提供する装備品を使って、ロシア軍と戦うための現実的な実地訓練を行なった。

マーク・ハートリング元米陸軍大将のような米国の「専門家」は、西側の先進的な軍事装備と優れたNATOスタイルの戦術を組み合わせることで、ウクライナの新興複合武器チームが、ウクライナのロシア軍を圧倒することができる「ハイテンポな作戦を実施できるようになるだろう」と考えた。



彼は間違っていた。

ハートリングと彼の現役の NATO の仲間たちは、今年 1 月にスウェーデンの防衛会議で演説した NATO の欧州連合最高司令官クリストファー・カボリ将軍の言葉に耳を傾けたほうがよかっただろう。

「この戦争(=ロシアとウクライナの紛争)の規模は、我々の最近の考えとは比例しない」とカボリは指摘した。

この事実から読み取れるのは、NATO は、ウクライナがロシアに対して要求しているような戦いをするための訓練も装備も持っていないということである。

この問題の悲しい真実は、ウクライナに割り当てられた攻撃的な任務を成功裏に遂行できる NATO 軍が存在しないことである。ロマンチャック大佐の防御壁に投げつけられたウクライナ軍の勇気と献身を疑う者はいない。しかし、NATO は装備とドクトリンの両面で、力対力の対決、特にロシアがそのドクトリンの強みを発揮する(防御作戦)一方で、NATO が経験のないこと(準備された防御に対する攻撃)をしようとする対決で、ロシアをうまく打ち負かす能力を欠いているという現実を、勇気と決意で乗り越えることはできない。

さらに、NATO とウクライナ軍最高司令部は、十分な火力支援なしにウクライナ旅団をロシアの防御用バズソーの歯に投げ込んだ。つまり、ロシア軍は「ハイテンポな作戦」から期待される勢いを生み出す前に、ウクライナ攻撃部隊を無力化し破壊するために砲撃力と航空力の優位性を最大限に活用することが自由にできた。

最終的な結果です：戦場ではロシアの現実が NATO の理論を凌駕し、ウクライナ軍が再び大きな代償を払うことになったのである。しかも、この状況がすぐにでも変わるとは思えない。

原文:Scott Ritter: Ukrainian Counteroffensive Runs Into Defensive Wall

## ●【悲報】ウクライナ復興税として徴収へ。日本は 20 兆円支援か？(2023 年 6 月 18 日)

岸田諸氏がウクライナ代理戦争に荷担し、中立の代わりに、メディアや SNS で情報統制までして戦火を煽ってきたツケが、巨額の復興支援金の請求で、1日も早く国民に真実を伝え、中立に引き返すべき。

ウクライナ復興税は、国民負担でなく、シオニスト帝国主義が占拠した大企業の減税を取り消して充填すべきです。

※あるツイッター意見:冗談はよせ！

ウクライナ復興税 20 兆円だと～！

なんで、ウクライナの復興を日本国民の税金とするの？

日本国民は 5 公 5 民の税金で、そんな余裕なんてないぞ～！

国民一人当たり約 15 万円以上の負担じゃないか～！



## ●マリウポリ住民の生の声(2023年6月18日)

「ウクライナは反転攻勢で俺たちを何から解放してくれるんだ？すでに俺たちは自由だ、子供と自由に歩き回れる、そんなことより戦争を終わらせる努力をするべきだ、どちらも大勢の人が死んでるんだから」

「ウクライナ人とナチスにはもう支配されたくない」

<https://twitter.com/i/status/1670323354971275265>



## ●【戦場の現実—ウクライナ召集兵】(2023年6月18日)

<https://twitter.com/i/status/1670403134844440577>

正直に言うが、戦争になど行きたくなかったよ。こんな年だし、健康に問題もあるから、健康診断を通らないと思っていた。

だけど...こうなっちゃった(笑)

いい記事なので、新版『ウクライナ戦争論』に載せました！

当然だな。軍当局は論理とか関係ないから。

やりたくない者に何を強制できるかね？役に立つと思うか？いや、無理だ。むしろ逆だ。来て面倒かけるのがオチだ。既に、政府当局にさんざんな目に遭わされているからな。ただ、何もかも放り出すだけだ。

議員や議員の息子、酪農家のダンナの息子でさえ1人足りとも戦場にはいないさ。いたのは錠前屋、運転手、教師、そんな奴らさ。議員の息子が車で誰か轢いたって刑務所に入れられないって証明されている。平気でディスコとかその辺で踊ってるよ。

タラス・シェフチェンコ(19世紀のウクライナ文学の始祖)が言った通りさ。

「地主たちは戦っても頭を切り落とされるのは貧乏人たちだ」

今、起きているのは、こういうことだ。

3月に夏休みでキエフに行ったが、まるで別の世界にワープしたみたいだった。あそこじゃ人々は、戦争なんてどこ吹く風さ。みんな普通に暮らしてる。順番が来るまではな。若い健康そうな兄ちゃんが女の子と散歩してるよ。俺はもうじじいだが。

帰り足で、自分の目で普通に暮らしてるのを見たよ。

ソファに横になってテレビを見て「全ていい調子だ」って言っていた。

ニュースをやってるテレビを見たら笑っちゃうよ。笑うしかないさ。

ニュースチャンネルはみんな「やるぞ！反転攻勢！」だ。

だが、俺がいたところでは GAZ66 トラックを運転したが、おそらく俺の年より古い代物だ。1973



年製の機関銃を積んでいたよ(笑)

あいつらが反転攻勢するんだろ。俺はいないけど。多分、そうだ。議論する気もないが、兵士たちは「反転攻勢だって？どうしたら実行できるんだ？」って言ってるよ。

俺の願いは、みんなが家に帰ることだ。みんな精神的におかしくなって、モラルもなくし疲れ果てている。自分たちを憎しみの中に放り出したクズどもの話など誰も信じない。兵士たちはもう自分の意見を言ってるよ。自分らの10倍の軍に勝てるわけないだろ、と。こんなの、ただのどん詰まりだと。

もう一度、和平交渉の決断をすべきだ。然るべき平和的な方法で解決することだ。とはいえ、俺は外交官でも何でもないが、クソな外交官なんて必要あるか？何の決断もできないだろ？ふつーの市民でさえ、もう交渉すべきだって意見に傾いている。それで何が反転攻勢だ、ふざけんな(泣笑)

何で攻撃するんだ？汚ねえ下着で、スコップ持ってか？俺は、いい武器持ってるやつなんて、ネットかTikTokでしか見たことがない。そういうのばかり出てくる。そういうTikTokのやつらが少しばかり戦線を踏んでいるんだろうよ。戦果はゼロだ。

こういう意見が俺たち兵士たちの共通の意見さ。もう戦線でTikTok撮って英雄気分を振りまくことはできない。TikTokの中だけならいいだろう、REXとか、俺は知らんが、そういう戦士たちばかりだ。

俺は前線にいて全部見たぞ。みんな酷いもんだ。だらしなく薄汚れて。用を足す場所もない。

小便は塹壕に小さな穴を掘って済ます。大便は出て行かなきゃいけないが、その間に体がバラバラになるかケツの穴剥き出しで戻ってくることになる。最後まで足せる幸運はめったにない。クソひとつが冒険だ。家に帰れるかどうかもわからん。そういうことだ。



## ●「オデッサの悲劇」の下手人の一人が抹殺される(2023年6月19日)

ロシア軍は、2014年5月2日にオデッサの労働組合会館で起きた殺人事件の参加者の一人・民族主義者であり狙撃手であるロマン・チェルノマズをアルテミフスク付近で抹殺した。これはРусская Веснаの軍事特派員によって報告され、またウの情報源によって確認されている。ちなみに、彼は有名なウクライナのナチス、ボフダン・チェルノマズの息子である。



## ●ドネツクへのウクライナ軍の砲撃は続く(2023年6月19日)

ウクライナの武装勢力がドネツクを終日砲撃している。死傷者が出ている。住宅の屋根やフェンスが破損し、窓ガラスが割られ、ガスパイプラインが損傷している。

さらに、ヤシヌヴァタへの大規模な砲撃が 2 時間にわたって行われている。人々は道路に出ることができない。

<https://twitter.com/i/status/1670476992209354752>



## ●ウクライナ軍はロシアの防衛線を突破するための装備を大量に失っている = 米メディア(2023年6月19日)

ウクライナ軍はすでに大量の重要な装備を失っており、一方ロシア軍は反撃の準備を入念に進めているため、ウクライナ軍はロシア防衛の第一線を突破することは困難であると、ワシントン・ポストが報じている。

同紙によると、ロシア軍は陣地を整えており、十分な量の砲弾とドローンが蓄積しているという。「彼ら(ロシア軍)には防衛計画を立て、塹壕を掘るため、数か月の時間があつた。今、彼らは自分たちの防衛線をよく知っているのため、最大限の自信を持っている」

ワシントン・ポストの専門家は、昨年のロシアの「軍事的な失敗」が、ロシア軍は弱いという誤ったイメージを生んでいる。攻撃的なオペレーションは(防衛よりも)常に困難であり、前進する軍は防御する軍よりはるかに多くの犠牲を出すと考えている。

欧米を支持する勢力が期待していたウクライナの反転攻勢は、すでに攻勢が2週間も続いているにもかかわらず、ウクライナにほとんど目立った成果をもたらしていない。ウクライナ軍は「地雷の海」そして大砲、ドローンで守られたロシアの防衛線を突破することが困難である。

「これは実に難しい。防衛線を突破するためのウクライナ軍の装備の多くはすでに破壊されており、この地雷を突破するのは本当に大変なことだ。しかも、これは幾重にもある防衛戦の第一線に過ぎない」

また、記事の筆者が指摘するように、ウクライナ軍が直面する問題は地上の脅威だけではない。ウクライナ軍はしっかりとした防御のための空軍を持たず、ロシアのヘリやドローンからの空からの絶え間ない攻撃にさらされている。

